異文化交流のひとこま
――ヴェルハーレンと縮緬本――

村 松　定 史*

Un épisode de l'échange culturel entre le Japon et l'Europe
――Émile Verhaeren et un livre d'estampes japonaises――

Sadafumi MURAMATSU

Voici un livre rare et précieux, *Images japonaises* (1896) qui a paru au Japon à l'ère de Meiji. Il est constitué d'estampes japonaises en couleur avec six poèmes français et présente le paysage japonais. À ma connaissance, on peut trouver ce livre à la Bibliothèque Royale Albert Ier (Bruxelles), au Peabody Essex Museum (Massachusetts), et à la Japan Foundation Library (Tokyo).

Images japonaises est un exemplaire de Chirimen-bon (livres en papier crêpe ou même plat japonais) que HASÉGAWA Takéjiro (1853～1938) a publiés en grand nombre. HASÉGAWA avait étudié l'anglais et offert au public des livres de lecture en anglais avec des dessins japonais. D'abord il a édité une série de vieux contes du Japon traduits par David Thompson, James Curtis Hepburn, Basil Hall Chamberlain et Lafcadio Hearn. Puis il a fait de même en français et en allemand. Ensuite, il a fait d'autres livres sur la vie et les coutumes japonaises. Ils étaient vendus comme souvenirs du Japon aux touristes ou comme albums curieux pour l'exportation.

Le peintre d'*Images japonaises*, SUZUKI Kason (1860～1919), est un artiste de l'école de la peinture japonaise assez connu même à l'étranger. L'auteur des poèmes du livre est Émile Verhaeren (1855～1916), un poète symboliste belge. Il est possible que ce soit Chamberlain qui ait présenté HASÉGAWA à Verhaeren. On peut supposer que HASÉGAWA avait l'intention d'exposer ce livre à l'Exposition Universelle de Paris de 1900.

Verhaeren a écrit six poèmes d'après les détails des paysages des quatre saisons: fleurs, arbres, bêtes, oiseaux, insectes, montagnes, lacs, mers et personnages, toutes choses typiquement japonaises. Verhaeren compose symboliquement des vers sur la nature asiatique, tout en y ajoutant des comparaisons européennes. Le dernier poème résume toutes les pages et termine en célébrant la naissance du nouveau Japon.

On peut dire qu'*Images japonaises* préfigure un des points de rencontre entre les cultures orientales et occidentales.

*Sadafumi MURAMATSU　英語・英米文化学科（Department of English Language and English and American Culture）

明治の中頃に日本で出版された *Images japonaises*（1896）という稀覯本がある。和綴横長で、全ページ多色木版の絵で飾られ、ところどころにフランス語の詩が入った日本紹介の美本である。和紙に細かな皺を寄せた縮緬紙（ちりめんがみ）を用いた、一般に「縮緬本」と呼ばれる絵入り本の系列の一冊で、縮緬本の出版を多く手がけた長谷川武次郎による刊行である。

Images japonaises は、ベルギーはブリュッセルのアルバート１世王立図書館[1]とアメリカ合衆国マサチューセッツ州のピーボディ・エセックス博物館[2]が所蔵しているが、我国では国際交流基金本部図書館の貴重書書庫に一冊が確認されている[3]。元来、論者がこの稀本と出会ったきっかけは、1996年８月にアルバート１世王立図書館を別の調査で訪れた折に、同図書館の貴重書所蔵室から調査を頼まれたことに始まる。本書は貸出しはおろか複写も禁止であったため、帰国後、日本で縮緬本を比較的多く集めている東京神田小川町の崇文荘書店を訪ねたが発見しえなかった。そこで、古書研究家の八木福次郎氏より、本書ではないが幾冊かの縮緬本を借覧し、また発行者長谷川武次郎についての情報も得て、ようやく同書の背景がおぼろげながら見えてきた。加えて、崇文荘で瞥見したピーボディ・エセックス博物館のカタログ[4]と本書のマイクロフィルムを後日入手したので、概要をここに報告するものである。

長谷川武次郎

明治から大正初めにかけて多数の縮緬本を発行した長谷川武次郎（1853～1938）は、嘉永６年10月８日、商家、西宮家の次男として江戸に生まれ、25歳の時、長谷川家の養子となる[5]。少年時より商売に役立てようと英語を学び、17歳ですでに英語を流暢に操る。商工講習所に一時通うが、築地に居住する宣教師などの在留外国人たちも彼の師であった。

初めは外国人の通訳をしたり日本人に英語を教えたりするが、やがて輸入のビジネスを始め、1877年に最初の妻と結婚。1880年には夫婦ともに宣教師トンプソン（David Thompson）によって洗礼を受ける。しかし、この妻とはほどなく別れ、後で示す *Images japonaises* の奥付にある「印刷者」欄に名の記された「小宮ヤス」が二度目の妻となる。武次郎は昭和12年７月19日、85歳で東京に没している。

弘文社の名で英語本の出版に着手したのが1884年（明治17年）、翌1885年には日本民話の外国語読本の出版を開始する。「桃太郎」にはじまり「養老の滝」にいたる英語による「日本昔噺」20巻が1885～1892年に刊行され、その続刊10巻ほどが1903年までに刊行されている[6]。最初の６巻は、長谷川の師であるトンプソンの英訳による。トンプソンは長老派教会の宣教師として1863年に来日しており、すでに日本語に精通するばかりか日本の民話に興味を持っていたからだ。その後の巻の訳述は、ヘボン（James Curtis Hepburn）、チェンバレン（Basil Hall Chamberlain）、ジェイムズ夫人（Mrs. Thomas H. James）、ハーン（Lafcadio Hearn）らが担当している。

やはり1885年から1903年にかけて「日本昔噺」20巻のフランス語版が出版されるが、内容および訳者、画家は英語版と同じである。また、このシリーズはドイツ語版も刊行され、さらにスペイン語、

オランダ語など、巻によっては十ヵ国語以上に訳されたものもあった。続いて日本の風俗、生活を描いた絵入り本やカレンダーなどを長谷川は次々と売り出す。「日本昔噺」のシリーズに始まる外国語読本は、当初は日本人の語学教材や副読本、地方への東京土産がねらいであったのが、しだいに来日する外国人たちの日本観光記念や海外への輸出用としてひろがっていくことになる。用紙も平紙であったものが、西洋人の好みに合わせて、エキゾチックで洒落たクレープ・ペーパーへと変わっていく。これは平らな和紙に絵を摺った後、縦横斜めに紙を押し縮めて一面に皺をよせたもので、絹のような手触りのよさと色彩の鮮やかさはとりわけ海外で珍重された。挿絵は、小林永濯、川端玉章、鈴木華邨ら当代の日本画家によるものであった。

鈴木華邨

Images japonaises の挿絵を担当したのは鈴木華邨（1860〜1919）である。華邨はほかに英語版「日本昔噺」シリーズ（続刊を含めた30数巻）の３分の１ほどを、また英語による「日本の風物」ものでは *Japanese Jingles*（1891）をはじめほぼ半数を描いている。円山派に師事したのち洋画も習った鮮明な画風の川端玉章（1842〜1913）や狩野派を学び風俗画をもよくした小林永濯（1843〜1890）と並んで、華邨の縮緬本における貢献は大きい。また、明らかに長谷川版「日本昔噺」シリーズに倣った、同時代の巌谷小波による博文館の叢書「日本昔噺」（1894〜1896）、「日本お伽噺」（1896〜1898）にも華邨は筆をふるっている。

鈴木華邨は、安政７年２月17日、江戸下谷の呉服屋に生まれ、本名を惣太郎、忍青とも号した。14歳にして四条派の中島享斎に師事し、後に土佐派や浮世絵の長所を取り入れ独自の境地を拓く。山水花鳥に優れ、文展、内国勧業博覧会、日英博覧会などで入賞する一方、尾崎紅葉の『不言不語』、幸田露伴の『天うつ浪』『新羽衣物語』、泉鏡花の『錦帯記』『照葉狂言』ほか、「文芸倶楽部」「新小説」「都の花」「読売新聞」の口絵、挿絵でも活躍した。また、陶磁器、銅器、漆器の図案も手がけ、外国人の間でもよく知られた日本画家である。大正８年１月３日、60歳で没している。

長谷川版縮緬本のうち、フランス語版で日本の風物を主題としたものとして確認できるものに次の３点がある。いずれも絵は浮世絵の歌川国芳の流れを引く新井芳宗による。

Scènes du théâtre japonais: “Terakoya”, Karl Florenz (1899) (7)

Au Japon: Les raconteurs publics, Jules Adam (1899) (8)

Au Japon: Les douze mois de l’année, Jules Adam (1902)

同様に日本の情景を描いた *Images japonaises* だけがなぜ鈴木華邨の絵によるものなのか。実はこの本の出版の裏には英語版 *Glimpses of Japan,* Benjamin Chappell（1896）の挿絵を急遽借用したという事情があるようだ。それは後で触れることにして、華邨の絵入り本の挿入詩の作者について次に述べておこう。

ヴェルハーレン

詩を執筆したのはベルギーの詩人エミール・ヴェルハーレン（Émile Verhaeren）（1855～1916）[9]である。ヴェルハーレンは、日本でいえば安政２年５月21日、フランドル地方のアントワープ近郊サン=タマンでラシャ織業者の長男として生まれた。ガンの中学校でジョルジュ・ローデンバックと相知り、文学に開眼。ルーヴァン・カトリック大学で法律を修めたのち弁護士となるが、文学への思い止みがたく、詩作、劇作に専念する。処女詩集『フランドル風物』（1883）は、高踏派風ではあるものの故郷の美しい風物を写実的にうたう。トラピスト修道院で過ごした後の詩集『修道僧たち』（1886）には神秘主義的傾向が色濃い。1887年頃から鬱の発作により詩風は一変、絶望と死をテーマとする苦悩に満ちた陰惨な内面風景を詩とする時期が続く。恐怖や絶望、彼岸への憧れを象徴的にうたった『黒い炬火』（1890）ほかの苦悩の三部作で詩人としての地位を確立。『わが道の面影』（1891）を経て恢復に向かい、無定型の自由詩にいたる。

以後、社会主義に関心を抱き、都市文明や近代産業をうたう社会主義三部作『幻覚の野』（1893）、『幻の村』（1895）、『触手ある都会』（1895）でリズム感溢れる詩句を展開。一方、妻マルトとの結婚生活の喜びを率直にうたった『明るい時』（1896）ほかの愛の三部作もこの頃のもの。その後は人類の栄光や科学の進歩を賛美する詩集を次々と発表、晩年には『夕べの時』（1911）ほかの時の三部作がある。日本でいえば大正５年11月27日、講演旅行の途次、名声の絶頂で汽車にひかれルーアン駅構内で事故死、61歳であった。

豊かな想像力と奔流のように溢れる詩句、そして美妙な繊細さを合わせ持つモダニズムの詩人である。後で対訳を示す本書の６編の詩にも、豊穣な語彙、自由詩ながら脚韻を踏んだ律動感、自然や生物を擬人化し比喩や表象を巧みに歌い込むなど、ヴェルハーレンならではの詩情と才知が見える。おそらく本書の詩を依頼されたのは、1895年にパリに定住し象徴主義詩人として活躍していた頃であろうが、それはまたサンボリストとしての内向性を否定し、社会主義へと接近しつつあった時期でもある。

日本でのヴェルハーレンの翻訳は、上田敏が1904年（明治37年）に「鷺の歌」を、翌年に「法の夕（のりのゆふべ）」「水かひば」「火宅」「畏怖（おそれ）」「時鐘（とけい）」を訳出したのが最初であろう。いずれの詩も「明星」に発表の後、『海潮音』（1905）に収録され、永井荷風らによる翻訳紹介がこれに続く。また訳詩集としては、新城和一、金子光晴、高村光太郎によるものがあるが、それらは大正から昭和にかけてのことである。したがって、1900年代になるまで日本では全く知られていなかったヴェルハーレンと、最初に接触を持ったのは長谷川武次郎であったということになる。彼にヴェルハーレンを紹介したのはおそらくチェンバレンと推測されるが、すでにベルギー、フランスでは名の知られた詩人に日本の本のためのフランス語の詩を依頼できたことは、大きな幸運であったといえよう。どういう契約が交わされたかは知る由もないが、1900年のパリ万国博覧会への出品を長谷川が意識していたことは確かなようだ。

万国博覧会

第１回万国博覧会は1851年にロンドンで開催された。パリでは1855年、1867年、1878年、1889年、1900年と19世紀の間に５回の万国博覧会が開催されている。フランスが産業の振興と科学技術の顕示に力を注いでいた時代であったわけだが、すでに海外事情に通じていた長谷川もこの機会を逃すまいと、1900年のパリ万国博覧会（Exposition Universelle de Paris）への出品を目論んだのである。この時の日本館は法隆寺の五重塔などを模したパビリオンで、すでに19世紀半ばからフランスでは人気のあったジャポニスムに縮緬本が花を添えたであろうことは想像に難くない。

ちなみに、壮士芝居を興した川上音二郎一座が日本の演劇界初の外国公演として、前年よりニューヨークからロンドンへと巡業中であったが、一座にこの博覧会への参加の誘いがかかる。川上貞奴の芝居と舞踊のあでやかな芸者姿は、彫刻家ロダンや作家ジャン・ロランに強烈な印象を残し、興行としても大成功をおさめた[10]。また、イギリス留学の途次、夏目漱石もこの万国博覧会に立ち寄っている[11]。一方で、日本における1877年（明治10年）の上野公園で開催された第１回内国勧業博覧会と1881年（明治14年）の第２回博覧会に、長谷川は積極的に参加している。博覧会が国内外の人々に自分の事業を知らしめる大きなビジネス・チャンスであることを彼はよく心得ていたと考えられよう。さらにつけ加えれば、鈴木華邨もその第１回内国勧業博覧会への出品作で金紋賞牌を受賞している。

Images japonaises が、長谷川版縮緬本の中でも、やや特別な一冊として位置づけられるのは、一つにはそうした博覧会を意識して名だたる詩人に執筆を依頼したという点である。他の縮緬本の訳述はすべて日本居留の外国人に依頼している。その訳述者たちは、チェンバレンとハーンを除けば本業は宣教師ないしは軍人であり文筆を業とする者はいない。つまり、日本を訪れたことがなく、しかも欧州で認められている文人に詩文を依頼した例は、おそらく本書しかないのである。

また、この本は *Glimpses of Japan* の絵をそのまま用いているが、ヴェルハーレンにはこの絵に合うような文を依頼したものだろう。後で対訳を示すが、詩文はもっぱら絵をヒントとしており、そこにまだ見ぬ東洋へのエキゾティックな思いを重ねている。ヴェルハーレンはどの程度、日本についての知識をもっていたろうか。たとえば、ジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』（1873）に描かれた横浜が、ロドルフ・ランドー『日本周辺の旅』（1864）やエメ・アンバール「日本」（『世界一周』誌下半期号）（1867）に依拠していることは富田仁氏の証するところだ[12]。また、芥川龍之介「舞踏会」（1920）がピエール・ロチ「江戸の舞踏会」（1889）に典拠をもつこともよく知られる通りである。

ところが、*Images japonaises* では、ヴェルハーレンが挿絵を丹念に見て詩をうたったことはよく分かるものの、それ以外の知識となると「フジヤマ・ゲイシャ」のレベルを出ておらず、もっぱら挿絵から想像した日本を机上でまとめ上げたと見るべきだろう。では本全体を詳しく見ていこう。

日本風物詩

本の体裁は、表紙、裏表紙を入れて15丁、左端を２ヵ所糸で止めた大和綴。図版の①～⑭はすべて見開きでそれぞれ一幅の構図を成している。（図版の右の記号㈠～㈩は挿入の詩を示す。）

表紙には「Images Japonaises.」のタイトルの下に「Illustrations de Kwasson.／Texte de Emile Verhaeren.／Publié par T. Haségawa.」とあり、左下に斜めに手書き風の白抜き文字で「T. Hasegawa／Kami Negishi,／Tokyo, Japan」とある。

ここでは仮にタイトルを『日本の面影』と訳すが、image という語には目に見える映像、画像と、心に浮かぶ心象、表象の両方の意味がある。日本の風物、生物、人物の四季折々の表情を描いた画集といえる。雪月花に代表される古来からの日本の美がコラージュ風に集約され、一巻の絵物語を展開している。内容はあとで詳述するとして、先に奥付に触れておきたい。

まず、横書きに隷書体で右から「版権所有」とあり、その下に縦書きで右から「著者／発行者」として「東京市京橋区日吉町十番地／長谷川武次郎」、「画者　鈴木宗太郎」、「印刷者　小宮ヤス」、最後に「明治廿九年五月一日印刷／同月七日発行」とある。

表紙の表記と総合すると、発行者は言うまでもなく長谷川武次郎である。長谷川は幾度か転居しているが、「日吉町十番地」は1890年12月～1901年のもので、本書の発行年1896年（明治29年）はその間のことだから矛盾はない。しかし、表紙左下に「上根岸」とある理由は不明である。「上根岸17番地」の住所は、1911年（明治44年）以降のことだからである。画家は鈴木宗太郎とあるが、鈴木華邨の本名は正しくは惣太郎、印刷者の小宮ヤスはすでに述べた武次郎の二度目の妻、小宮屋寿である。文を担当したエミール・ヴェルハーレンの名は、奥付には見あたらない。

原本は多色で木版の刷りもよく、鮮やかな仕上がりは外国人ならずとも眺め入る色彩本であるが、ここには白黒の複写しか掲げられないので順を追って注を付けておく。

表紙絵は、まさに外国人が一目見て日本と分かる「フジヤマ・ゲイシャ」風の図である。富士山と湖水と鳥居は箱根あたりの風景かもしれないが、そこに人力車と日傘の婦人を配して日本らしさを強調したものだろう。

①は左にヤエザクラとフジ、右は最後の詩㈩に出てくる浅草公園の第１区観音堂の風景か。②は、ハスの名所でもある、弁財天を祀った上野の不忍池であろう。③は虫を取り合うスズメの群れと、コウモリ、クモ、昆虫など。④の空にあるのは夕月であろう。詩㈤の地にはモミジと流水文の薄い地模様がある。⑤の左の針葉樹には鈴が一つ紐で掛けられている。右はカケスの幼鳥か。⑥で水辺にいるのは姉妹であろう。左はヒガンザクラ、ツバキ、キク、アカトンボ。右はヨシとヨシキリ、つがいのカモ。⑦はサザンカとコガラ、ムクゲとハチ。⑧は集中で最も美しい墨絵のような入江の図。手前の２隻と左隅の人家に灯がともっていることから夕景と分かる。⑨はコブシを活けた掛け籠と短冊、その室内から円窓越しに遠望の富士。⑩のウグイスの止まる左斜線の下は９種類の紋章をあしらった図柄。右はヒマワリ、ナデシコ、イネに、チョウ、アカトンボ、イナゴを配する。⑪はアジサイ、ナデ

表紙

Images Japonaises.
Illustrations de Kwasson.
Texte de Emile Verhaeren.
Publié par T. Haségawa.

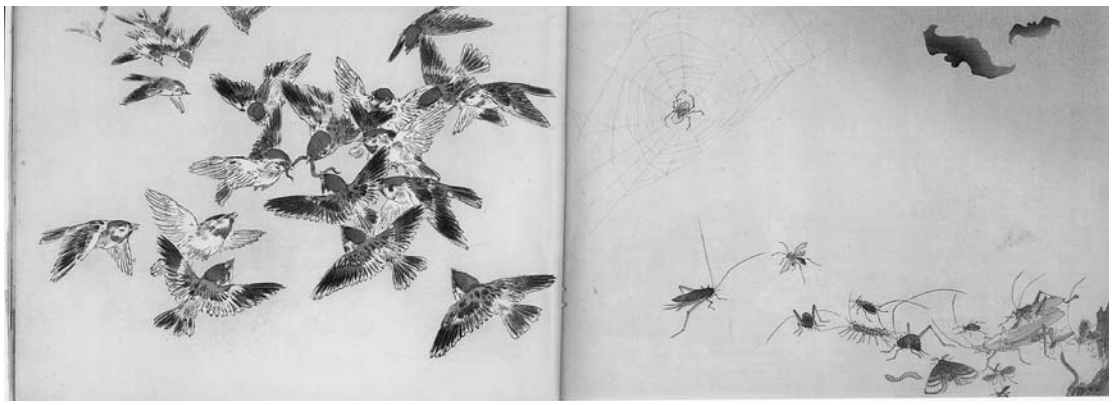
①

Voici vingt croquis joyeux
Où l'on rencontre, inscrits,
Avec prestesse, avec esprit,
Pour ceux d'Europe et de Paris,
Les lacs, les montagnes, les mers, les cieux,
D'un Japon frais et printanier.
Temples en bois, parmi des cerisiers,
Canards mitrés dont les plumes sont des lueurs;
Touffes d'iris et de roses en fleurs;
Marchands qui vont, avec de pleins paniers
Ici-bas, vers les marchés hospitaliers;
Gheishas avec samourais sans page
Tout se retrouve au long des pages
De cet album familier.

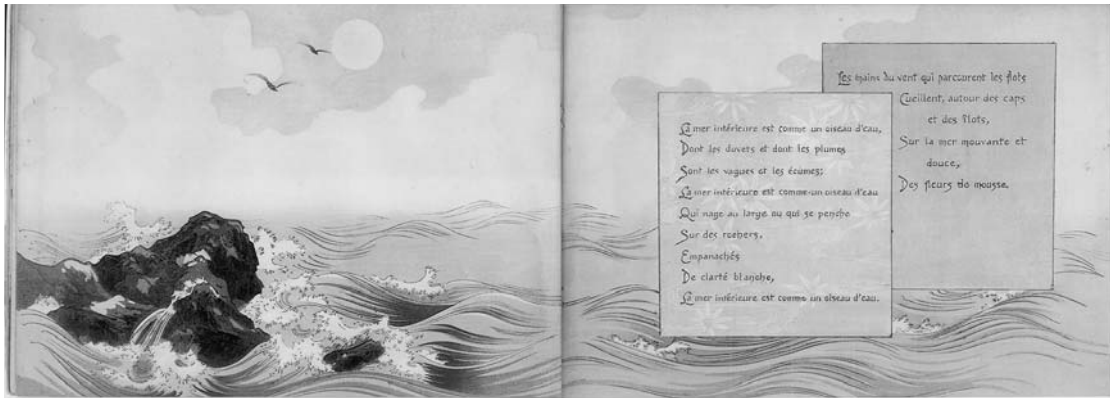
(イ)

②

③



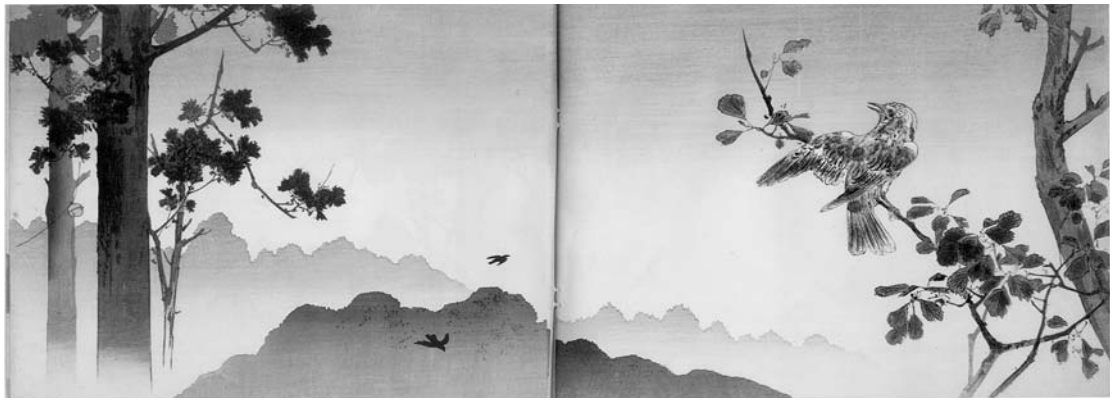
④


La mer intérieure est comme un oiseau d'eau,
Dont les duvets et dont les plumes
Sont les vagues et les écumes;
La mer intérieure est comme un oiseau d'eau
Qui nage au large ou qui se penche
Sur des rochers,
Empanachés
De clarté blanche,
La mer intérieure est comme un oiseau d'eau.
Les haines du vent qui parcourent les flots
Cueillent, autour des caps
et des flots,
Sur la mer mouvante et
douce,
Des fleurs de mousse.

5

(ロ)(ハ)

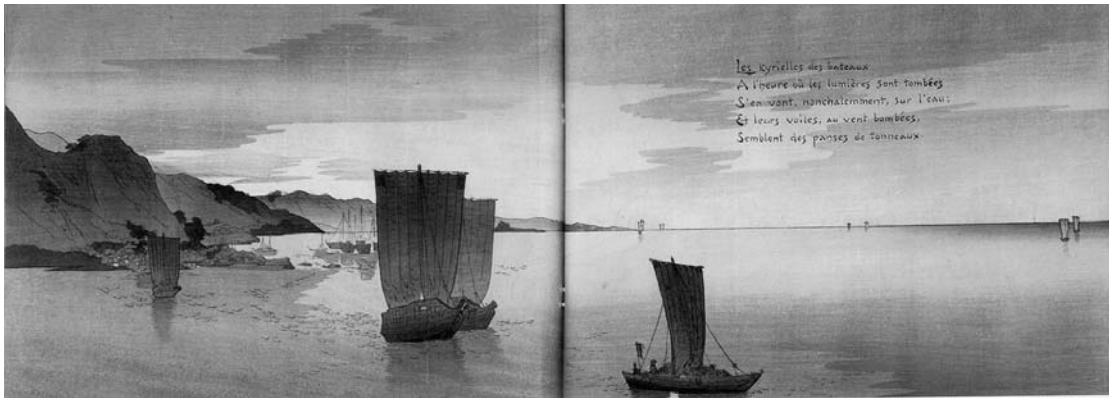
⑤



⑥

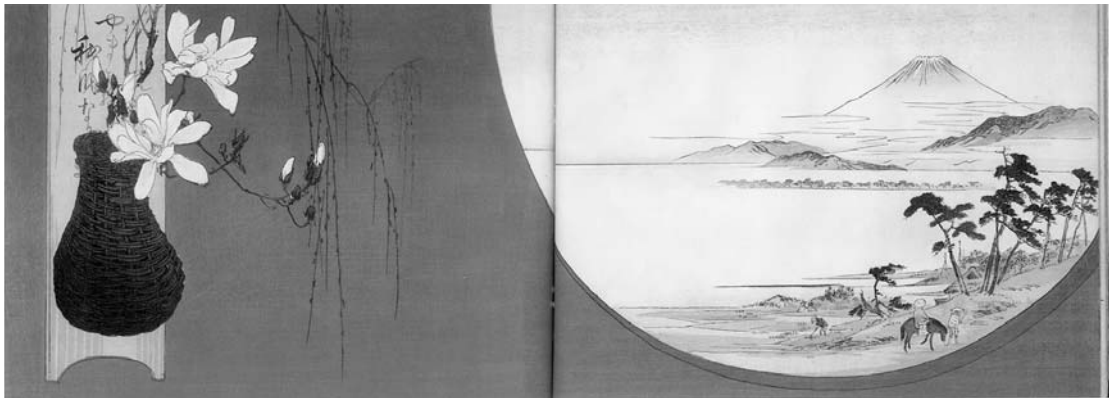
⑦

⑧

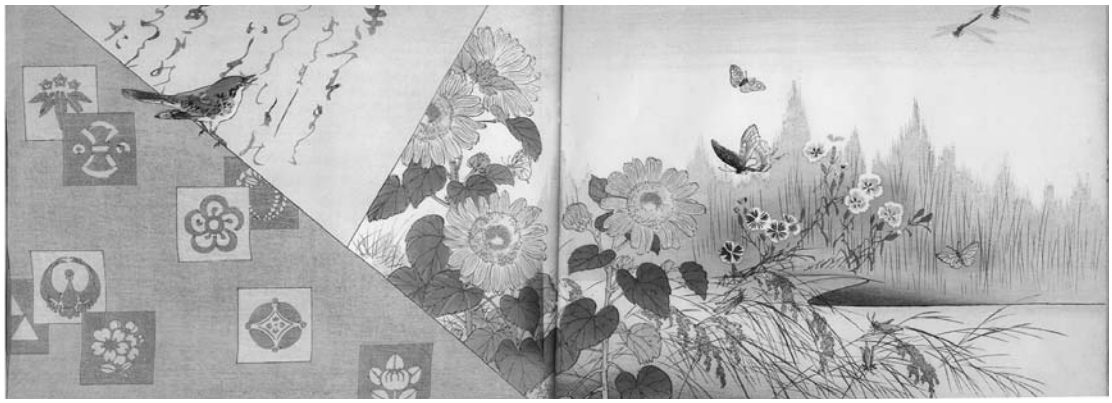

les cyrielles des bateaux
A l'heure où les lumières sont tombées
S'en vont, nonchalemment, sur l'eau;
Et leurs voiles, au vent bombées,
Semblent des panses de tonneaux.

(二)

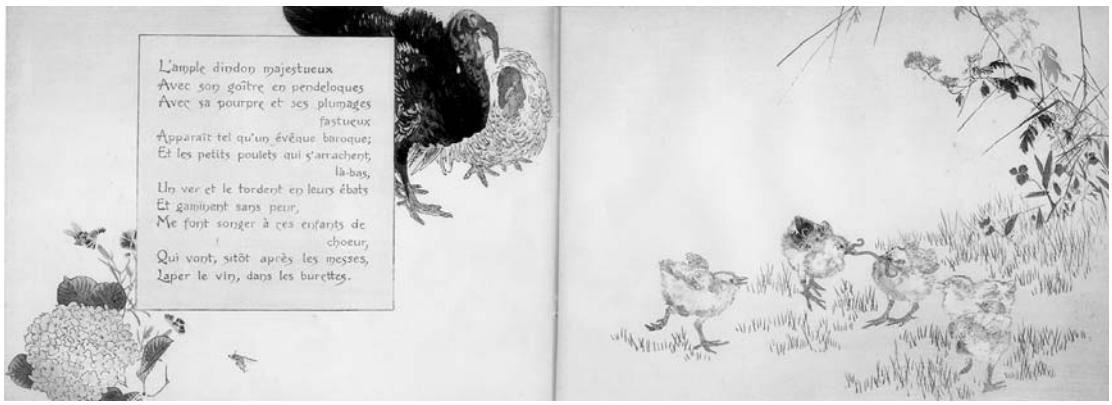
⑨



⑩

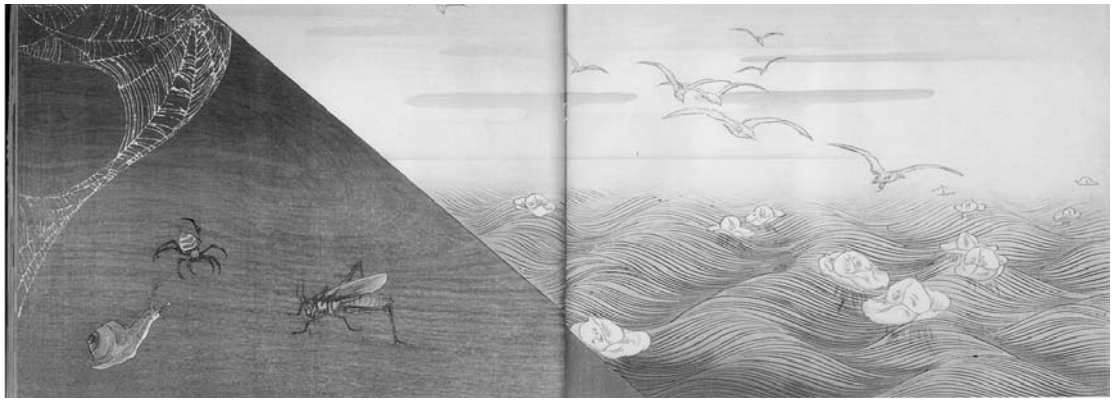


⑪


L'ample dindon majestueux
Avec son goître en pendeloques
Avec sa pourpre et ses plumages
fastueux
Apparaît tel qu'un évêque baroque;
Et les petits poulets qui s'arrachent,
là-bas,
Un ver et le tordent en leurs ébats
Et gaminent sans peur,
Me font songer à ces enfants de
choeur,
Qui vont, sitôt après les messes,
Laper le vin, dans les burettes.

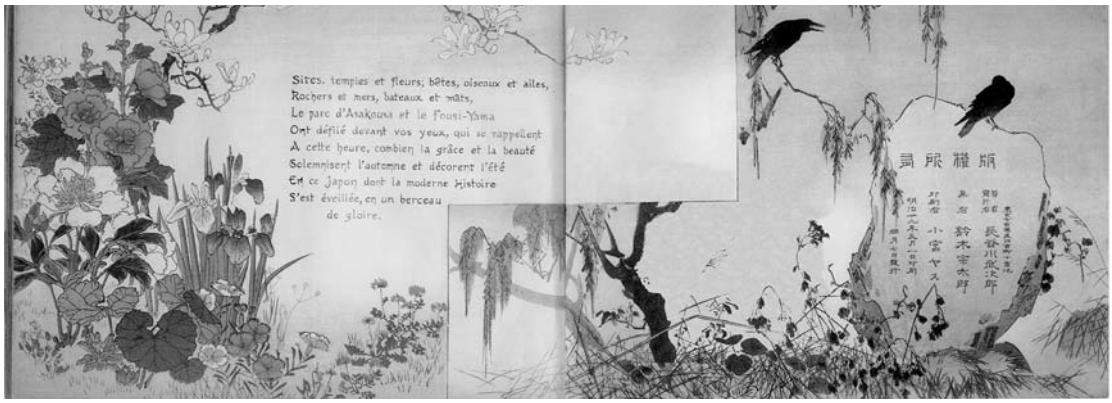
(ホ)

⑫



⑬

⑭


Sites, temples et fleurs; bêtes, oiseaux et ailes,
Rochers et mers, bateaux et mâts,
Le parc d'Asakousa et le Fousi-Yama
Ont défilé devant vos yeux, qui se rappellent
A cette heure, combien la grâce et la beauté
Solemnisent l'automne et décorent l'été
Et ce Japon dont la moderne Histoire
S'est éveillée, en un berceau
de gloire.

裏表紙

(イ)	Voici vingt croquis joyeux	ここに20の楽しい絵
	Où l'on rencontre, inscrits,	目にすることが出来るのは
	Avec prestesse, avec esprit,	欧州、巴里の人のため
	Pour ceux d'Europe et de Paris,	巧みに聡く描かれた
	Les lacs, les montagnes, les mers, les cieux,	春さわやかな日本の
	D'un Japon frais et printanier.	湖に山、海に空。
	Temples en bois, parmi des cerisiers,	サクラに埋もれた木の寺や
	Canards moirés dont les plumes sont des lueurs;	羽根のつやつや光るカモ。
	Touffes d'iris et de roses en fleurs;	アヤメ、ツバキは花盛り。
	Marchands qui vont, avec de pleins paniers	商人は溢れるほどの籠を負い
	Là-bas, vers les marchés hospitaliers;	心浮き立つ市場へと。
	Gheishas avec samouraïs sans page	供を連れない侍と、一緒に歩く芸者たち。
	Tout se retrouve au long des pages	ページをめくればそのたびに
	De cet album familier.	うっとりとなる絵入り本。
(ロ)	La mer intérieure est comme un oiseau d'eau,	内海はまるで水鳥
	Dont les duvets et dont les plumes	綿毛は泡
	Sont les vagues et les écumes;	羽根は波。
	La mer intérieure est comme un oiseau d'eau	内海はまるで水鳥
	Qui nage au large ou qui se penche	はるか沖へと泳いだり
	Sur des rochers,	岩をやさしく覆ったり
	Empanachés	真白い光を
	De clarté blanche,	きらめかせ
	La mer intérieure est comme un oiseau d'eau.	内海はまるで水鳥。
(ハ)	Les mains du vent qui parcourent les flots	波から波へ駆けめぐり、風は両手で摘んで行く
	Cueillent autour des caps et des îlots,	岬や島に寄せて来る
	Sur la mer mouvante et douce,	静かに揺れる海原で
	Des fleurs de mousse.	水泡の花を摘んで行く。
(ニ)	Les kyrilles des bateaux	次から次と舟の影
	A l'heure où les lumières sont tombées,	夕日の落ちる頃あいに
	S'en vont, nonchalemment, sur l'eau;	水面をゆっくり過ぎて行く
	Et leurs voiles, au vent bombées,	帆はいっぱいに風を受け
	Semblent des panses de tonneaux.	あたかも樽の太鼓腹。
(ホ)	L'ample dindon majestueux	堂々とでっぷりとした七面鳥
	Avec son goître en pendeloques	ぶらぶら喉の垂れ飾り
	Avec sa pourpre et ses plumages fastueux	緋色と豪華な羽根飾り
	Apparaît tel qu'un évêque baroque;	着飾った司教のお通りだ。
	Et les petits poulets qui s'arrachent, là-bas,	虫を取り合う雛たちは
	Un ver et le tordent en leurs ébats	大騒ぎしてついばんで
	Et gaminent sans peur,	恐いものなしの大はしゃぎ
	Me font songer à ces enfants de chœur,	あたかも合唱隊の子が
	Qui vont, sitôt après les messes,	ミサが終わるや争って
	Laper le vin, dans les burettes.	祭壇のワイン舐めに行くよう。
(ヘ)	Sites, temples et fleurs; bêtes, oiseaux et ailes,	様々な景観、寺に花、動物に鳥、翼、
	Rochers et mers, bateaux et mâts,	岩に海、舟に帆柱、
	Le parc d'Asakousa et le Fousi-Yama	浅草公園、富士の山、
	Ont défilé devant vos yeux, qui se rappellent	次々繰り広げられたものはみな
	A cette heure, combien la grâce et la beauté	いま目に浮かぶ気品と美で、どれほど
	Solennisent l'automne et décorent l'été	秋を彩って、夏を飾っていることか
	En ce Japon dont la moderne Histoire	この日本に近代の歴史は目覚めた、
	S'est éveillée, en un berceau de gloire.	生まれ出ずる栄光のうちに。

シコとシチメンチョウ。右は虫を取り合う雛とツユクサ。⑫の左にはクモ、カタツムリ、バッタが談合ないしは睨み合っている。海にはクラゲの群れと海鳥。⑬は左から、多種の花による花綱飾り、野菜を入れた負い籠、熊手を持つ少年、鍬と煙管を持つ百姓、風呂敷包みを持つ下女と婦人、僧侶、武士、天秤棒で荷を担ぐ魚屋。⑭は左にコブシ、タチアオイ、ボタン、アヤメ、スミレ、フクジュソウ、ナデシコ、タンポポと、あたかも季節を越えた寄せ植えの庭。右はワレモコウなどの枯野とカラス。奥付を自然石にはめ込んだ構図には、碑を模した遊び心がうかがえる。裏表紙は梅の木と笹に雪が積もった冬景色。右下に、華邨のサインと香炉の形の落款が見える。

では次に詩㈠〜㈥を対訳で示し、華邨の絵とヴェルハーレンの詩との関連を見ていこう。

新しい日本

㈠ プロローグとして、目次のように本全体の絵を要約している。vingt croquis といっているが、概数であって、見開き14葉に表紙と裏表紙の絵を加えても16葉である。Pour ceux d’Europe et de Paris とあるのは、まさしく1900年にパリで開催される万国博覧会を訪れる人々を念頭に置いていよう。Temples en bois, parmi des cerisiers は㈥に名前の出てくる浅草公園の観音堂の風景であろう。市場へと向かう人々は⑬の情景を誇張したものか。iris（アヤメ）は⑭に描かれているが、roses（バラ）は⑦のムクゲあたりを見誤ったものか。ここでは⑥にある rose de Japon（ツバキ）と解しておく。

㈡ 内海の様態を海鳥の姿で比喩している。日本らしさより、ヴェルハーレンの象徴技法が強く出ているかに読めるが、挿絵では、岩に砕ける波頭があたかも白い鳥が波間に遊んだり岩に止まろうとしているように見え、絵を忠実に言葉にしたともとれる。

㈢ Les mains du vent（風の手）という擬人化、Des fleurs de mousse（泡の花）という表象、ここにはヴェルハーレンの詩的な独創性が見える。

㈣ 日の落ちる灯ともしごろ、帆船が入江へと帰って来る。nonchalemment（のんびりと）とある３行目までと、終わりの２行はやや矛盾する。絵では夕凪なのか、帆はさほど風を受けていない。海も舟もほとんど動きのない墨絵風の景色である。ところがヴェルハーレンは帆を des panses de tonneaux と樽の膨れた腹に喩える。ビールやワインの大樽を思わせる西欧的な発想で、日本の静かな海景に西洋人のレトリックを接ぎ木した観がある。日本的な静寂の美が、満帆の躍動的な力強さにすり替えられてしまったといえよう。

㈤ majestueux（威厳のある）と形容される威風堂々の七面鳥を司教に、雛たちを教会の合唱隊に喩えたのもきわめて西洋的である。カトリックの中学で学び、詩人となってからも一時、修道院で暮らしたヴェルハーレンには、ごく自然の連想であったろうし、フランスやベルギーの読者にもまた理解しやすい比喩であろうが、これは全く非日本的世界となってしまった。

㈥ 総括として、これまで見てきた日本の自然や風景、四季の美しさを讃えている。（挿絵①〜裏表紙はほぼ春夏秋冬の順を追っている。）そして、ようやく開国した「新しい日本」の万国博覧会への参

加を記念する思いがこめられている。

1633年以来の鎖国が1853年のペリー来航によってやっと解け、維新によって1863年、明治体制は始まった。本書の刊行された1896年当時は、日清戦争を経て、日本経済の近代化は急速に進み、文字通りの新日本が栄光のうちに誕生し躍進を始めた時代であったといってよい。ヴェルハーレンが最後にうたいあげてくれた新生日本は、確かにあらたな時代を歩みだしていたのである。そうした社会背景のなかで、長谷川はいち早く英語を学び、宣教師たちとのつながりから内外の外国人たちとの交流を拡大していく。生涯をかけて取り組む外国語版絵入り本の出版という事業が、そのきっかけにおいてキリスト教伝道のもたらした福音の一つであったことも興味深い事実だが、何よりも西欧文化の模倣や移入に皆が気を取られている時代に、むしろ外国語を介して日本文化を世界に発信して行ったことは、国際交流の偉大な先駆者といってよいのではないか。そして、その長谷川本の一冊に19世紀ベルギーの象徴派詩人ヴェルハーレンの名が刻されていることは、注目すべき異文化交流の歴史的接点として、記憶にとどめられてしかるべきだろう。

〈注〉

(1) Bibliothèque Royale Albert Ier, Boulevard de l'Empereur 4, Bruxelles, Belgique の M. Fabrice van de Kerckhove と Mme Sophie Basch の両司書（夫妻でもある）より日本刊行の本書についての質問を受け、のちに調査の協力も得た。同館蔵書は縮緬紙ではなく平紙本（20.2×27.6㎝）であり、他の 2 館の蔵書も同様である。

(2) Peabody Essex Museum, East India Square, Salem, Massachusetts, U.S.A.

(3) 国際交流基金本部図書館（東京赤坂）貴重書書庫蔵。本稿中の複写図版は主にこれによった。

(4) Frederic A. Sharf, *Takejiro Hasegawa: Meiji Japan's Preeminent Publisher of Wood-Block-Illustrated Crepe-Paper Books*, Peabody Essex Museum Collections vol.130 No.4, Oct., 1994. 本書は長谷川武次郎とその出版事業に関する綿密な考察であり、同館所蔵の縮緬本のリストも巻末に付されている。拙稿は本書に負うところが大きい。

(5) 長谷川武次郎の伝記的事実については注(4)および下記の文献を参照した。
鈴木あゆみ「長谷川武次郎と縮緬本について」〔「白百合女子大学児童文化研究センター報」第13号 1994年 7 月〕
同「縮緬本の中の子ども達　A Day with Mitsu を中心に」〔「白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集」第 1 号　1997年 3 月〕
石澤小枝子「B. H. チェンバレンの AINO FAIRY TALES について」〔「梅花女子大学文学部紀要」第32号　1998年12月〕

(6) 弘文社「日本昔噺」シリーズの詳細については下記の文献を参照した。
福田清人「ちりめん本について」〔「日本古書通信」第334号　1972年 2 月〕
アン・ヘリング「縮緬本雑考（上）」〔「日本古書通信」第457号　1982年 5 月〕
同「縮緬本雑考（中）」〔「日本古書通信」第458号　1982年 6 月〕
同「縮緬本雑考（下）」〔「日本古書通信」第459号　1982年 7 月〕
同「続・縮緬本雑考（1）」〔「日本古書通信」第461号　1982年 9 月〕
同「続・縮緬本雑考（2）」〔「日本古書通信」第463号　1982年11月〕
同「続・縮緬本雑考（3）」〔「日本古書通信」第464号　1982年12月〕
同「続・縮緬本雑考（4）」〔「日本古書通信」第466号　1983年 2 月〕
同「続・縮緬本雑考（5）」〔「日本古書通信」第467号　1983年 3 月〕

同「続・縮緬本雑考（6）」〔「日本古書通信」第645号　1983年４月〕
同「続・縮緬本雑考（7）」〔「日本古書通信」第646号　1983年５月〕
同「続・縮緬本雑考（8）」〔「日本古書通信」第648号　1983年７月〕
同「続・縮緬本雑考（9）」〔「日本古書通信」第649号　1983年８月〕
同「続・縮緬本雑考（10）」〔「日本古書通信」第650号　1983年９月〕
同「続・縮緬本雑考（11）」〔「日本古書通信」第651号　1983年10月〕
同「続・縮緬本雑考（12）」〔「日本古書通信」第652号　1983年11月〕
同「続・縮緬本雑考（13）」〔「日本古書通信」第657号　1984年４月〕
同「続・縮緬本雑考（14）」〔「日本古書通信」第659号　1984年６月〕
同「続・縮緬本雑考（15）」〔「日本古書通信」第670号　1985年５月〕
同「続・縮緬本雑考（16）」〔「日本古書通信」第677号　1985年12月〕

アン・ヘリング「児童図書翻訳事始－他の言語へのひろがり－」〔『江戸児童図書へのいざない』くもん出版　1988年８月〕

石澤小枝子「Ａ・Ｂ・ミットフォード『昔の日本の物語』－日本昔話の欧米への初訳－」〔『フランス児童文学の研究』久山社　1991年４月〕

⑺　フローレンツ（Karl Florenz）はチェンバレンやハーンと同様、東京帝国大学で講じた日本学者。ドイツ人で、日本風物をテーマの縮緬本の独訳４冊も手がけている。

⑻　アダン（Jules Adam）は、他の縮緬本の仏訳をしたドートルメール（J. Dautremer）と同じくフランス公使館の通訳官。

⑼　フランス語読みでは「ヴェラーレン」だが、本稿では日本の慣用でもあるフラマン語読み「ヴェルハーレン」を採る。

⑽　御荘金吾「川上音二郎の手紙と手記（十）」〔「日本古書通信」第671号　1985年６月〕

山本進「川上一座欧米巡業記録」（CD解説）〔『甦るオッペケペー　1900年パリ万博の川上一座』東芝EMI株式会社　1997年12月〕

荒俣宏「演劇博物館と川上貞奴」〔『万博とストリップ』集英社　2000年１月〕

⑾　（明治33年10月23日　夏目鏡宛　フランス　パリより）「（…）今日ハ博覧会ヲ見物致候ガ大仕掛ニテ何ガ何ヤラ一向方角サヘ分リ兼候（…）博覧会ハ十日や十五日見テモ大勢ヲ知ルガ積ノ山カト存候（…）」〔『漱石全集』第22巻　岩波書店　1996年３月〕

⑿　富田仁「想像の“ヨコハマ”－ジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』」〔『横浜ふらんす物語』白水社　1991年11月〕